



学校だより

伸びゆく子

令和5年1月10日
横浜市立中沢小学校
1月 号

心に響き、記憶に残るもの ～黒豆を煮ていたのは誰？～

学校長 川又 美貴子

新しい1年が始まりました。3年ぶりに行動制限のない年末年始、皆さんはどのように過ごされたでしょうか。私も元日、この2年は新型コロナの感染を懸念して年初の挨拶だけですませていた家族と、3年ぶりに実家で集まって会食をすることができました。とは言っても実家は同じ区内でみそ汁の冷めない距離ですし、すでに両親は他界しているため、兄夫婦、妹、そして私の家族とのささやかな会です。

そこで、お節料理を囲みながら子どもの頃に食べていた実家の黒豆についての話になりました。私が「お父さんは、黒豆にはうるさかったものね。黒豆だけは自分が煮るって言ってやってたよね。」と言うと、兄が「いや、お父さんは釘を用意してただけでしょ。」(注：艶のある美しい黒豆にするためには、釘などの鉄材と煮るのが良いとされています。)(私) いやいや、黒豆だけはお父さんが煮てたよ。お母さんに任せるとしわしわになるから、って。」すると妹が、「え、お父さんは料理なんて絶対にしなかったよ。」(兄・私)・・・。

両親は私が20代の頃に他界しているため、もう答えを知る由もありません。2つ上の兄と、3つ下の妹、20年以上同じ家に住んでいたにも関わらず、こうも記憶が違うものかと、子どもの頃が懐かしく思い出されると共に、とても不思議な気持ちになりました。私としては、3人兄妹の中で一番料理の手伝いをしていたつもりなので、きっと私が一番近くでお節づくりも見ていたはずだという自信があります。とは言え、一番長く両親といた兄や、可愛がられていた妹の言っていることが間違いだとも言い切れず、自分の見ていたもの、感じていたことはどれほどあやふやで不確かなのだろうと感ぜずにはいられませんでした。

20年以上一緒に暮らしていてもこうなのですから、人と同じことを見て、経験していても、そのどの部分が印象に残り、心に響き、記憶に残るのかというのはそれぞれ本当に違うのだろうということを改めて感じます。「同じように思っているだろう。」と想着いても、話してみたら見ていたところが全然違って、なんて言うことはきっとたくさんあるのだと思います。後で答え合わせをしたくても、「実家の黒豆」のように、できなくなってからでは遅いので、自分の心に響いたこと、考えたことは、しっかり言葉にして伝えていきたい、と一年の始まりに改めて思いました。

今年も、自分だけでなく目の前の一人ひとりの見ているもの、感じていることを大切にして教育活動を進めていきたいと思えます。ご理解、ご協力をよろしくお願いいたします。

